

# 宮廷医 J・C・A・エルヴェシウスと一七〇九年の凄惨

—— 評伝 エルヴェシウス家の人々〔その四〕 ——

永治日出雄

## 第一節 一七〇九年のパリと宮廷医エルヴェシウス

(一)

ルイ十四世統治の末期一七〇九年にフランスは未曾有の寒冷と災禍に襲われた。すでにその前年ルイ十四世はスペイン王位継承戦争で苦境に立ち、王孫ブルゴーニュ公の出陣にもかかわらず、オウデナールデ、リール、ブルージュ等の要地を失った。イギリス・オランダ・ドイツ同盟軍に包囲されて、兵士は飢餓や悪疫に苦しみ、銃後の民衆も長期の戦争によって著しく疲弊していた。<sup>(1)</sup> また、夏には雨が多く、各地で小麦の収穫が不良となった。投機業者が小麦の買占めに乗りだし、財務総監デマレは外国からの穀物輸入を建議する。その年は早くも十月に冬の寒さとなり、やや穏やかなクリスマスのもと、想像を絶する寒波がフランス全土に襲来した。<sup>(2)</sup>

一七〇九年一月五日イエス公現祭の前夜に、パリの気温は氷点下四十度まで降下した。<sup>(3)</sup> すべての交通と商業が途絶

し、裁判や興行も中止される。セーヌ河は固く凍結し、河口や海浜も氷野と化した。パリの主要道路は積雪と雨水で覆われ、暗く重い雲のもとで人々は午後三時からロウソクを点す。街路には毎朝遺体が横たわり、たとえばふたりの煙突掃除人が門口で抱きあつて死んでいた。市庁舎近くのグレーヴ河港では同月九日貨物船四十隻が、浮動した氷塊に突き倒され、積荷である穀物、ブドウ酒、木炭がすべて流失する。こうした巨大な流水は輸送の拠点セーブル河港でも同様な惨事を惹き起し、セーヌの橋梁や川岸をも各所で破壊した。この寒冷は下旬に二日間だけ和らいだものの、一月二八日から一層苛烈な第二波に引き続く<sup>(4)</sup>。

ヴェルサイユ宮では頑健なルイ十四世が狩獵を中止し、暖炉を離れなかつた。宮廷人はながく外出を見合わせ、衛兵の年次交代も延期される<sup>(5)</sup>。一月二〇日ブルゴーニュ公妃を訪問したヴェネチア大使によれば、暖房した室内でもたえず歩き回つて寒さに耐えた。かねてから財務総監シャミヤールの経済政策に批判的であり、スペイン王位継承戦争の終結をも提案したサンシモン公爵は、『回想録』で一七〇九年の災禍をつぎのとおり記録している。

さきにも述べたとおり、その冬は凄惨であつた。それに匹敵する冬を人間の記憶が想起できないほどである。寒冷が約二カ月ほとんど緩まずに続いて、当初から河川は河口まで凍結し、海岸でも車馬で大きな荷物を運ぶのが困難となつた。その後寒さが一時的に緩和し、地上を覆っていた雪が溶解する。だが、同じ程度の寒波が突如再来し、さらに三週間続いた。二つの寒波はいずれも厳しく、ヴェルサイユ宮ではもつとも強烈なエリキシル剤、もつとも濃厚なりキュールであるハンガリー女王酒が、暖房された部屋の戸棚や、煙突を配した広間で、しばしば酒瓶を破裂させた。<sup>〔中略〕</sup> こうした第二の寒冷がすべてを破滅させた。さまざまな果樹が枯死し、クルミ、オリーブ、リンゴ、ブドウなどの木々も対処できないまでの被害を受けた。ほかの樹木も無数になぎ倒され、庭園は廢墟となり、一切の穀物が地上から消えた。これほど破滅的な荒廢になびとも対処できない。

だれもが古い穀粒を握り占めている。収穫が絶望的になるのに比例して、パンが高騰した。もっとも敏い者は従来小麦を作った農地に大麦を蒔き、大半の人々がこれを見做った。彼らはもっとも幸福な部類に属し、とにかく救いを見つけたのである。<sup>6)</sup>

こうした極寒は三月一五日によくやく退いたものの、五月の中頃でもときに氷が張り、夏もまた長雨に悩まされた。異常な気候に加えて物資の買占めと物価の高騰が民衆の悲慘を倍加する。当時小麦は主要な街道やセーヌ河によって運ばれ、パリ中央市場などに千五百軒のパン屋が店を出していた。一七〇九年の寒波が始まるや、貧者の常食である黒パンはいつも開店直後に払底する。また、前年に一キロ四スーであった白パンが、四月には八スーへ、五月初旬には一四スーへと値上りした。こうした状況のなかで官憲に逮捕された犯罪者七二人のうち、一六名がパンなどの食品を盗んでいた。なお、彼らの中にはれっきとした指物師三名とサン・タントワーヌ街区の職人も見出される。<sup>7)</sup> これら天災にひき続く経済的・社会的荒廢をサン・シモン公爵の『回想録』は痛烈に描破している。

まさしく飢餓によって死んだ人々、あるいは悲惨のどん底で発生する病氣によって歿した人々は数えきれない。無数の家族が破滅に至り、それに付随してあらゆる種類の不幸が累々と連なつた。おまけに従来きわめて厳格に履行されたパリ市庁舎定期金もまず遅滞し、まもなく縮小された。こうした措置がパリのすべての家族、聖なものとされたパリ市庁舎定期金もまず遅滞し、まもなく縮小された。こうした措置がパリのすべての家族、および地方の多くの家族を悲嘆の淵に突き落す。同時にまた、租税の引き上げ・多様化・請求がきわめて峻厳に強行され、フランス全土を徹底的に荒廢させた。買えるものがすこしでも残っていれば、信じられぬほど高い価格にされる。農村で餌の不足や飼主の窮乏のため大半の家畜が死んでも、新たな独占が企まれる。昨年まで貧者を救済した多くの人々が辛じて露命をつなぐ境涯にある。彼らのなかで秘かに施しを受ける者も珍しく

ない。最近まで貧者の恥辱と責苦であった病院をどれほど沢山の人々が探し求めたことか。破滅した病院からどれほど多くの貧者が吐き出されて公衆の負担となり、飢餓で歿したも同然であることか。また、いかに多くの清廉な家族が穀倉のなかで死にかけていたことか。<sup>(8)</sup>

寒冷や凶作だけでなく、劣悪な生活環境と伝染病の蔓延が死者・病人を激増させた。オルレアン公の実母シャルロツテ・エリザベス（ファルツ侯女）の書翰によれば、一七〇九年一月だけで首都の死者は二万四〇〇〇人に及ぶ。一般救護院の門口には頻繁に乳児が捨て置かれ、五月には收容人員一万のうち三歳以下の子どもが一五〇〇人にも及んだ。もともと民衆を苦しめた疾病は赤痢と壊血病であり、とくにこれらは劣悪な環境や食物の不足に起因した。<sup>(9)</sup> 財務総監デマレの訓令や警視総監ダルジャンソンの報告など当時の公文書を綿密に調査した経済史家サン・ジェルマンは、貧民の救済がパリでも絶望的な状況にあったことを明らかにしている。

パリ治療院の「患者数が突如激増した」と、「高等法院首席検事」アゲゾーは早くも一七〇九年一月一九日財務総監に報告した。その時点でも患者は二六七五名に及んだが、彼らを治療するのに僅少な金、三万ルーブルしか院長の手元になかった。それでも患者や貧民のため粗末な麦わらの床をただちに用意し、異常な寒気にもかかわらず、余儀なく彼らを廊下や土間、さらには中庭や回廊で寝させた。首都にある大半の教会も宿泊所に一変した。<sup>(中略)</sup>

栄養の不足と不衛生な飲食が赤痢の怖るべき蔓延を惹き起した。また、野菜と果物の欠乏が壊血病を誘発した。四月二四日パリ治療院は赤痢患者二二〇〇人で一杯となり、外にもなお三〇〇〇〇人が待機するので、サン・ルイ病院に緊急の援助を求めた。<sup>(中略)</sup>

プールジュは九月に赤痢の猛威に襲われた。そこでは一日に四〇人を葬ったと伝えられる。パリにおいては

「大麦パンの摂取がしばしば脊椎彎曲の原因になった」、との記録もある。高名な医家エルヴェシウスが宮廷に召され、秘薬四万服の納入を求められた。ただし、細民のなかでもっとも貧しい人々、すなわち病院を持たぬバリ近郊の農民に、国王がそうした秘薬を配分した。オルレアンやモンタルジとともに、より離れた若干の地方へも同様な対策が取られる。しかし、ルイ十四世の首席侍医であるところから、ファゴンがエルヴェシウスより有能とみなされ、そのような任務への出勤を命ぜられた。<sup>10)</sup>

こうした災禍に先立つ二一年前、経験医ジャン・アドリアン・エルヴェシウスはバリ施療院でイベカ吐剤を実験的に試用し、赤痢の治療に画期的な成功を収めた。以後この特效薬はフランス国王軍に常備されるとともに、民衆への施療に際してもしばしば用いられる。そして、エルヴェシウスの一家と秘薬がとくに重視されるのは、凄惨な一七〇九年においてである。

## (二)

先回述べたとおり、サン・シモン公爵は『回想録』一七〇一年の項でイベカ吐剤の創業者エルヴェシウスを讃えたが、一七〇九年に関する叙述でも彼の人格と施療をふたたび称賛する。つぎに掲げる『回想録』の一文はさきに引用した記述と部分的に重複するものの、(凄惨な一七〇九年)の項において彼の博愛的な活動をあらためて浮彫にしたことが注目される。また、ここでは経験医エルヴェシウスの次男ジャン・クロード・アドリアンにもサン・シモンは言及し、息子の医業に一層高い評価を与えた。

エルヴェシウスはオランダ人である。彼はいくつかの種類の疾病に対してきわめて有能であるが、学者風の医家でもなく、大学にも属しないので、経験医として処遇されてきた。赤痢の治療に卓効あるイベカ吐剤は、

彼のお蔭で用いられるようになった。これによってエルヴェシウスは大いなる名声を得たが、医者仲間から残忍な嫉妬を浴びて軽んじられた。とはいえ、彼は多数の人々を診察し、そこには貴顕も含まれる。また、彼は善良で誠実な人柄であり、慈愛深く、忍耐強く、寛仁かつ廉直で、知性や感性も乏しくない。その息子はみや王妃の首席侍医であり、至当にも出藍の誉れを博している。彼も豊かな知性と宮廷人たる資質に恵まれ、やがて王宮で重きを置かれる。幸いにもそこまで『回想録』を書き進むならば、あらためて彼を登場させることになる。父〔経験医エルヴェシウス〕のほうはパリに留まっても、宮廷に出仕しても、姿を消すと人々が探すので、一度だけ数カ月留守にした以外は、かならず不在の日時を明示した。彼は陰謀を好まず、利害にも囚われず、ほかの医者と異なつて秘密を洩らさず、己れの職務に専念した。彼は毎日頼つて来るあらゆる貧者を昼頃から自宅で診察し、そうした人々の言葉に耳を傾け、医薬や食物、ときには金銭までも与えた。また、いかなる人間に対しても彼が往診を断ることはなかつた<sup>(11)</sup>

経験医ジャン・アドリアン・エルヴェシウスはボン・ヌフ橋近くで〔正義号〕船長の未亡人ジャンヌ・デグランジュを見染め、一六八四年に彼女と結婚した。挙式前に夫妻は男の子を儲けたが、この第一子については詳らかでない。次男のジャン・クロード・アドリアン・エルヴェシウスは一六八五年七月一二日パリで誕生した。<sup>(12)</sup>これが哲学者クロード・アドリアン・エルヴェシウスの父である。(Jean-Claude-Adrien HELVETIUS 1685-1755 以下本稿ではこの人物を宮廷医エルヴェシウスまたは父エルヴェシウスとも呼ぶ。なお、本稿の補遺「エルヴェシウス家系略図」を参照されたい。)

次男ジャン・クロード・アドリアンが出生した三年後、経験医エルヴェシウスは王太子の難病を快癒させ、ルイ十四よりイベカ吐剤の専売特認書を授与された。ただし、彼は国王の懇請にもかかわらず、ヴェルサイユへの定住を断

り、パリで医業を続ける。シテ島サン・ルイ街を引き払った彼は、カルチュ・ラタンのギル・クール街にしばらく住んだあと、一六九二年頃からサン・ミッシェル広場近くのセルパント街に居を構えた。そこには毎朝多数の患者が押し寄せ、貴賤貧富の差別なしに治療を受けていた。<sup>13</sup> こうして幼時からジャン・クロード・アドリアンは民衆の病患や苦悩をまのあたりにし、父親の博愛的な活動を感じた。一七七三年に刊行された『パリ大学医学部名士略伝』には宮廷医エルヴェシウスの人間形成について左記の記述が見出される。

少年エルヴェシウスは両親のもとで育てられ、父親の指導を仰ぐとともにその徳行から感化を受けた。彼はコレージュ・ド・クアトル・ナシオンで学び、澁刺たる精神と類稀れな明敏さによって優秀な成績を収めた。

その頃まで彼の好みと力能は父親の意向と一致していた。だが、通常の課程を修了し、決断が必要とされるや、完全な合意が父子の間で難しくなった。若く元気な息子は傑出した人物になろうと考え、軍人という職務に就くのを希望した。父親の意向は己れと同じく医学に進ませることである。事態は面倒になった。しかし、一七歳か一八歳の青年エルヴェシウスは敬愛する父親の意志あるいは期待を尊重し、謙抑にもみずからの熱烈な希望を断念する。こうして彼はパリ大学における学業へと進んだ。<sup>14</sup>

少年ジャン・クロード・アドリアンが入学したコレージュ・ド・クアトル・ナシオンは、マザランの遺言によってコンテイ河岸に創立された名門校であり、自由な斬新な学風を特色とした。当時パリで自然科学の授業を本格的に組み入れたのは、コレージュ・ド・クアトル・ナシオンだけである。そうした伝統のちに物理学者ダランベールを育て、現在もフランス学士院およびマザラン図書館として継承されている。<sup>15</sup> コレージュを修了したジャン・クロード・アドリアンは父親と同じ道を選び、正統的な専門教育を受けた。やがて医家として身を絶てた彼は、とくに一七〇九年の災禍において驚嘆すべき働きを示す。この事実を『パリ大学医学部名士略伝』はつぎのように記録する。

父親への思い遣りから始めたが、実際に彼は医学という仕事に関心を持ち、そうした関心が真の情熱へと変わった。三年間彼は解剖学と化学に専念した。彼は己れの職務を果すためにしか、家を離れなかった。あらゆる場所でもっとも重要な業務すら中止させた一七〇九年の厳冬においてすら、彼はみずからの責務、とくにパリ施療院および慈善病院で医療を行うという責務をいささかも忽せにしなかった。危惧を抱いた家族が彼の異常な熱意を鎮静しようと努めたが、無駄であった。いかなる事態にも彼は揺がなかった。そのような労苦によってのみ公衆の信頼に応えうる、と彼は信じていた。同じ道を進む者にとって、これこそ熱情と競争心を覚醒する模範である。<sup>(16)</sup>

医家エルヴェシウスに係り深いパリ施療院はフランス最大の医療機関であり、国籍・宗教・年齢・性別の如何を問わず、数千の患者が収容されていた。そこには臨機に開業するふたつの分院が付設され、伝染病患者の激増に対応した。なかでもサン・ルイ分院はシテ島から四キロ離れたベルヴィル丘に築かれ、六〇〇名の伝染病患者を収容する。こうした隔離や医療についてパリ大学医学部は適宜助言を与え、公安や貧民対策の見地から司法当局が厳しく監視した。なお、同じ性格を有するパリ慈善病院は設備において優れるものの、入院可能な患者数は二百にすぎない。また、ルイ十四世によって設立された一般救護院は、乞食と浮浪者の矯正を主眼とし、病人や細民の扱いについてはしばしばパリ施療院と拮抗した。<sup>(17)</sup> ホセユーによる詳細な研究『十七世紀および十八世紀におけるパリ施療院』を引用する。

なによりも〈壊血病患者〉や〈伝染病・ペスト〉の犠牲者が十七世紀と十八世紀のパリ施療院を埋め尽した。ただし、ともすれば相異なる疾病の患者たち、伝染性という症状だけを共通に持つ患者たちが、アンシヤン・レジームではこれら曖昧な名称で呼ばれていた。

中世から一六世紀まで不安と恐怖を撒き散らした伝染病、そしてルイ十四世や摂政の治下にあつてすらパリ

全市で発生した伝染病に関して、ここで歴史を語る余裕はない。エール・ド・エストワール著『記録・日誌』のなかで如実に描かれた一五八〇年のベストとそれに対するパリ市の措置、あるいは一五九六年から一五九七年にかけての悪疫とその惨害に遡らないまでも、一七世紀の初頭、すなわち一六〇六—一六〇七年、一六一二年、一六一八年、一六一九年の伝染病に遭遇して、パリ施療院が付属機関であるサン・ルイ分院とサン・マルセル分院を開設したことを留意したい。(中略)

一六二三年にパリ市政務府から諮問を受けたパリ大学医学部は、つぎのとおり明言した。ベストは普通信じられているとおり空気の汚濁に起因するだけでなく、〈商業の輸送路〉を通じてルアンやボーヴェから運ばれてくる、と。したがって、地方で悪疫の兆しが見えたら、パリを護るために今後は特別の対策を取る必要がある、と。高等法院もパリ当局に同意し、伝染病に関してふたりの保健監察官(右岸サン・ルイ分院に一名、左岸サン・マルセル分院に一名)を任命し、また夜間に患者を病棟に運び込む警察史をも配置した。患者たちは己れの商売や仕事の妨げにならぬよう、しばしば身分や住所を秘匿したので、医師の側にも探索のため以下のような命令が下された。すなわち、「伝染病に侵されたと思われるか、疑われる者、あるいはほかの疾患の進行する過程で伝染病併発の兆候を認めた者については、管轄の警察署長に申告されたく、これを怠ったり、隠した場合には医師の資格を剝奪される」<sup>(18)</sup>。

伝染病患者の大半は劣悪な生活環境の犠牲者にほかならないが、彼らを受け入れるパリ施療院の施設もきわめて不備であった。一台のベッドを平均でも三名、ときには八名が共有し、相異なる伝染病の患者が一緒に横臥していた。どのベッドでもなかのひとりには病に喘ぎ、他のひとは死に瀕し、残りのひとはすでに死んでいる、と当時市井では噂された。同病院の死亡率は二割を超え、沢山の遺体が二輪馬車に山積みされて、毎夜墓地まで運ばれた。<sup>(19)</sup>【十七

世紀および十八世紀におけるパリ施療院」も下記のとおり述べる。

伝染病が引き続き蔓延した。一六八一年サン・ルイ分院には六〇〇名の壊血病患者がいた。それは一六八四年にやや後退したあと、一六八五年に激しさを増した。一六八五年二月九日サン・ルイ分院には六〇〇の患者がさらに加わり、施療院管理部はふたりの外科医を外部から補強した。同分院は一六八九年十一月にようやく休業する。

一六九九年二月二日にサン・ルイ分院は再開される。自分たちのように共同病室の窓際へ（通風孔）と煙突を作り、（空気浄化）のため適時火を焚かないならば、多くの壊血病患者を置くべきではない、と一般救護院にパリ施療院管理部は主張した。この病気には充分な大気が良薬である、と実際に人々が考えた。一七〇二年に『外科診察集録』を出版したサヴィヤールによれば、サン・ルイ分院の中庭で担架に乗せられ、太陽光線を身に受ける壊血病患者が迅速に快癒することに、人々は注目している。また、あらゆる事柄に一家言を持つギユイ・バタンは、つぎのような感想を述べる。「この病気は貧乏で栄養の悪い人々の疾病である。これは北方または海洋のレプラであって、血液や内部器官の特殊な腐乱に起因し、生来の身体組織を転倒させる。良質のパン、少量のブドウ酒、白い肌着、清澄な空気、そして発病の初期にはある程度の瀉下が、悪い水をけつして飲まないのと同じく有効である。……民衆の貧困を癒す人こそ、壊血病を真によく癒す。」〔中略〕

一七〇九年は施療院にとって悲劇的であった。災厄に襲われるすべての年と同様、壊血病がまたも蔓延し、七月には患者数四五〇〇に及んだ。壊血病患者を隔離するため急拠サン・ルイ分院が再開されて、九月二十八日に六〇〇人以上を収容し、以後も入院患者が日毎に殖えた。

さきに述べたとおり、その財政的基盤は慨嘆すべき状態にあった。緊急の援助がなければ、パリ施療院の失

墜は必至である、と管理部は上申した。<sup>(20)</sup>

施療院を統括する管理部はパリの富裕な篤志家から成り、またその医師部は通常つぎのような構成であった。正医官七名、副医官七名、外科医一名、助手一二名、外科助手一二名。このほか司祭、薬剤師、看護修道女、炊事婦を含め、同病院に常時勤務する人数は五〇〇名を超えた。こうした医師部の規模は一二〇〇余の病床を有する同病院にはあまりにも小さく、病室の凄惨な状況とあいまって、医官の任務をきわめて過重にしたと推察できる。<sup>(21)</sup> ホセユーによれば、パリ施療院の診察は以下のように行われた。

夏は六時から、冬は七時から回診が始められた。回診を行うのは常勤の正医官であり、各病室の看護修道女、一名の外科助手、一名の薬剤徒弟がこれに随伴した。この際薬剤徒弟は正医官の処方帳簿に記入し、薬剤部へ提出した。ついで正医官に指示された瀉血や吸玉などの処置をするよう、昼頃に外科助手が出向いた。十八世紀からは新入りや重態の患者をとくに診察するため、副医官が夕方に再回診を行った。こうした診察がいつも几帳面になされたわけではない。一七三五年の法規は回診の監視を下記のとおり定めている。「毎日各病室では看護修道女のもとに診察日誌を置き、回診に来た医官の到着時刻と退出時刻を記入すること。なお、医官が薬局部で昼食に費やした時間は、患者のために用いた時間とみなさない。……また、患者の言葉を忍耐強く聴かぬ人、看護修道女の意見を注意深く受け入れぬ人に対しても、そうした記帳が必要である。

現在と同じように患者への回診には医学生が付き従った。大学医学部の規程やとりわけ一七〇七年の勅令が職業的な訓練を強化し、病院における二年間の実習を彼らに課したからである。<sup>(22)</sup>

医学博士の称号を取得した一七〇八年頃からジャン・クロード・アドリアン・エルヴェシウスは、経験医ジャン・アドリアンの医業を本格的に助けるとともに、パリ施療院やパリ慈善病院での勤務を続けた。なお、同じ頃より父親

の導きによつてヴェルサイユへも出仕し、兵士や農民への施療に参加した。ただし、彼が王妃レクザンスカの首席侍医に任ぜられるのは一七二八年であり、さきに掲げたサン・シモン公爵の讃辭は同年以降に執筆されたものと思われる。<sup>(23)</sup>

## 第二節 一七〇九年のフランスと宮廷医エルヴェシウス

### (一)

一七〇九年の極寒はフランスの農村部にも深甚な被害を与えた。若芽を出したブドウの樹が凍りつき、ブドウ園の全面は火事のあとのように黒くなる。ほとんどの果樹が氷で裂け、根元まで枯れた。ロワール河の北では桃、杏、サクランボ、さらにはヒイラギやネズまで同様であった。プロヴァンスではほとんど唯一の収入源オリヴが全滅し、ブドウも各所で氷結した。また、莫大な数の家畜が飢えと寒さのため死に、ウズラや鳩や雀の大群があちこちで凍死していた。飢えた鳥は田野の屍を漁り、兎にまで襲いかかる。アランソンでは狂暴になった狼の群れが、一組の飛脚と騎馬を食い尽くした。<sup>(24)</sup>

ブルゴーニュの寒村に育つたヴェランタン・ジャムレー<sup>(25)</sup>デユヴァルの自伝は、民衆自身による一七〇九年の記録としてとくに重要である。一六九六年車大工の息子として生まれた彼は、横暴な義父の農場や陰鬱なトネール救護院から逃げ出したのち、あるところで粉屋の小僧として働かれ、ほかのところでは家畜の番人として働いた。<sup>(25)</sup> こうして放浪の歲月を重ねるうちに、プロヴァンス地方モングラ・タン・ブリで彼は未曾有の寒波に襲われる。以下ジャムレー

II デュヴルの膨大な自伝『回想』から関連する部分を抜粋する。

このような農夫のもとで私は人間のさまざまな行爲について省察するようになったが、彼の家去つて数月後、一七〇九年の怖るべき冬が私を襲い、またこれに伴う飢餓とあらゆる災禍が私を苦しめた。〔中略〕極度の寒冷が惨害を拵げ、いかなる旅人もその猛威になぎ倒されるなかで、私はあちこちの村落で仕事を求め、寒さと飢えに対する避難場を空しく求め歩いた。モングラ・タン・ブリまで行き、その城館から二キロほど離れた農地に差しかかったとき、私は激烈な頭痛に襲われた。刻一刻頭部が打ち割られ、眼が見えないように感じたほどである。農家の入口に辿りついた私は、身体を暖める場所、死ぬほどの激痛にすこしでも耐えられよう、横臥できる場所をすぐに貸してほしい、と居合わせた農夫に頼んだ。即座に彼は私を羊小屋に案内し、そこにいる温和な動物の呼吸が、まもなく私の痙攣を癒してくれた。しかし、私を苛む頭痛は、気が狂うほどの激しさになった。翌朝私の様子を見に来た農夫は、腫れて熱っぽい眼、むくんだ顔貌、全面膿疱で覆われた深紅の身体を眺めて愕然とした。「天然痘だ、かならず死ぬ」と彼は躊躇なく私に告げた。というのは、農夫自身が生きる糧を持たず、病む私をなぐ支えることはできないからである。また、異常な気候が病気を悲劇的なものにするのに、私の病状では必要な介護を受けにすら行けないからである。そうした嘆きに応える体力すら私にはないので、農夫は憐憫の情に動かされ、私のもとを離れた。すぐに彼は古い布袋を携えて戻り、衣服を脱がせたあと、ミイラのように私の身体をその布袋で包んだ。また、羊小屋の寝藁が幾層かに区分されていたが、その若干を農夫は私のまわりに集めた。<sup>(26)</sup>

同じ頃に騎士ローベバンはパリからリヨンに至る街道で、三二箇の死体を目撃した。ロワール地方ロモランタンで一〇〇〇名が窮乏のため死に、さらに二〇〇〇名が絶望的であった。オルレアンの森に避難した人たちが生のアザミ

やナメクジを食べる。ガティネのある家で一週間のうちに七人が餓死する。ルマンでは困窮する貧民が一万八〇〇〇人に及んだ。ロワール地方ではこのような事態を憂慮してマールムティエ大修道院がパンの施与に踏み切った。この計画が伝わると、トゥールや近隣の町村から八〇〇〇人が押し寄せ、施しものの奪い合いで四五名が死亡した。<sup>(27)</sup>これら無数の惨劇が稀有な寒冷や凶作だけでなく、民衆への抑圧と搾取から発したことは言うまでもない。己れを救護してくれた農民自身の惨めさを、ジャムレー||デュヴァルはつぎのように描写する。

こうして私が汚濁と腐朽のなかにいわば埋葬されている間に、その冬は最強の猛威をもって田園を破壊しつづけた。そうした試練に私が抗しつづけた羊小屋の背後に、クルミと柏の高い林があり、それらの枝は屋根の上にもまで伸びていた。毎晩のように私は雷鳴や大砲を思わせる突然の轟音に眼を覚まし、凄まじい物音の原因を朝になると知らされた。寒冷が極度に厳しいため、巨大な岩石が炸裂し、クルミや柏などの樹木がいくつか根元まで裂かれたり、割られたと言う。なお、赤貧のため思うように私を救護できない、とその情け深い農夫ははつきり述べた。なぜなら、人頭税と間接税によって、すなわちその多くがいかにもフランス政府らしい税金によって、彼はまったく破滅したからである。そして、徴税役人が彼の家具までも強奪し、農耕に必要な家畜すら売り払ったからである。農地の所有者に属していなければ、羊小屋もまた没収されたであろう。正當にも農夫は私への対処についてあらかじめこのように覚悟させた。実際発病した当初は数日間微々たる食物すら摂れず、彼に金銭的な負担もかけなかった。〔中略〕食欲の回復につれて私が平素の食物を求めたとき、農夫が提供できる唯一のものは、薄いスープと数片の黒パンであった。この黒パンも水で硬くなり、斧で砕く必要があった。空腹で苦しむ私は、そのスープをただちに吸ったり、そこに黒パンを煮込んで、水が融けるのを待った。そうした峻厳な食生活はひとりの悔悛者を聖化できるほどであったが、もはや費用が負担できないこ

と、支える余裕のあるほかの人になんらか仕方なことを、貧しい農夫は私に告白した。その農場から三キロほど離れた教会堂の主任司祭が彼から話を聞き、隣接する家屋へ私を運び込むことに同意した。そこで人々は私を墓場から引き出し、寒冷から護るため古着で包み、長靴をはかせた。ついで私は驢馬の背に乗せられ、脇で落馬を防ぐひとりの男とともに、農場から村落へ連れていかれた。途上で蒙った寒さのため、そこに着いた私をなつかば死んでいると人々は考えた。また、仮に死を免れたとしても、手足は不随になるに違いない、と。初めから私を火に近づけたら、その種の災禍がかならず降りかかったであろう。だが、慎重かつ賢明にも人々は私の腕や足を雪で摩擦し、感覚を回復させるまでそれらをぬるま湯に浸した。そして、ほかの器官も元気になるよう、ここでも横臥する場所へ移された。八日後寒さが緩むと、私にはひとつの部屋とベッドが与えられ、恵み深い主任司祭の寛仁と配慮によってまもなく体力と健康を取り戻した。<sup>(28)</sup>

民衆の惨苦はやがてフランス各地で権力者への反抗となって爆発する。三月初旬すでにルイ十四世は暴動の危険を奏上されていた。四月下旬イギリス国王に同行したブルゴーニュ公は、パリ・ヴェルサイユ間で四〇〇〇人の婦人にパンを求められる。サン・ジェルマン市場やモベール広場には掠奪と反乱を扇動する者も現れた。同月セーヌ右岸サン・ロック教会でひとりの避難民が歩兵隊に攻撃されると、周辺の民衆が大挙してこれに反抗した。彼らは支援のスイス傭兵五〇人にも激しく石を投げ、近隣の警察署に対しては窓を碎き、門を焼いた。こうした騷擾は首都だけでなく、ポルドー、ボーヴェ、ブルゴーニュでも人々が糧秣商人の小麦を掠奪し、その農場を焼失させる。中央山塊ブルボネの群衆は八〇〇人以上で総代監サゴンヌを襲撃し、軍隊の反撃によって死者を出した。<sup>(29)</sup> 大胆にもジャムレー・デュヴァルはルイ十四世の専制政治と侵略戦争をこうした災厄の遠因として告発する。

今回の災厄が人民の間にどれほど怖ろしい惨事を惹き起したことか。また、いかに多くの人々が雪に囲まれ、

飢えに苛なまれて、荒屋で哀れにも死んだことか。こうした事実を描写する気力と勇氣のある文筆家を、私はまったく知らない。また、富者が犯罪的なまでに冷淡であったこと、世俗の人だけでなく、神に仕える人までが、高利貸になつて露骨で醜惡な横領をしたこと、国民全体の不幸に付けている彼らが、己れの穀倉を閉ざし、己れの心を非情にし、食糧の価格を高騰させたことをいかなる文筆家も語っていない。フランス政府がこの全国的な災害をどれほど痛切に感じ、これを阻止するためどんな方策を採つたか、私には判らない。従来に劣らぬ厳しさで兵役、人頭税、塩税、間接税がどこでも請求されたことだけを、私は知っている。人々は大自然の猛威のほかに、それよりはるかに凄惨で破壊的な争鬪に曝された。スペインに据えられたオーストリアの別家は九年前から仮死なしいし不能の状態に陥り、同国の内閣が姑息かつ偽瞞的な政策でそれを深刻なものにする。我こそ世界におけるすべての王笏を見事に操縦できると堅く信ずるブルボン王家、だが実際にはそうした能力よりも権謀術数で怖れられるブルボン王家は、スペインを獲得する方途を見出した。自由を喪失して以来、自己の利益を支配者の野心や悦楽と混同するよう慣らされたフランス人は、広大な君主国を専制政治に屈服させるため、己れの生命と財貨を惜しみなく捧げた。この君主国も無益で残酷な征服によつて自滅しつつあり、同国の成員も中心から極端に離れて世界の四大陸に分散し、眞の生命体というよりむしろ亡霊を思わせる。かくも多く戦鬪、かくも頻繁な黄金と血の洪水のあとに、ブルボン王家の公子のひとりにスペイン王位が確保された。こうした破局的な事件のちスペインでは、世界の残りの国を服従させるため、銃を造り、剣を鍛えることが、フランスとの合意によつて続けられた。

地球の西半球・東半球にある数多の国々をひとりの君主に支配させよう、と貴頭が熱心に励む一方、私はみづから安住できる国をひとつも見出せないでいた。飢餓が耐え切れぬほど苛酷に私を苦しめる。プロバンスで

生き延びるのは不可能だと知って、ある日私は思案した。今回の飢饉は世界的なものだろうか。また、小麦が氷結しなかった土地が、地球のどこかに存在するだろうか。南方か近東では若干の地方が太陽への角度や距離によつて凄惨な年（一七〇九年が以後このように呼ばれている）の惨害を免れたかもしれない、とある人が私に教えてくれた。この教示が私のなかに深い悦びを呼び戻し、省察の源泉ともなった。<sup>(30)</sup>

(二)

フランス農村部での医療はアンシャン・レژیムにおいてほとんど組織化されなかった。貧しい農民を援護したのは主として宗教的な慈善団体であり、病人に必要な薬や食物がパリから村落の主任司祭に届けられた。ただし、ルイ十四世はより計画的な医薬の配備を意図し、伝染病の治療に卓越した経験医ジャン・アドリアン・エルヴェシウスをとくに重用した。こうした事業の権限は財務総監に置かれ、医薬の配送も不定期であったが、各地の総代監にエルヴェシウスが送付した医薬は、一七〇六年から一七〇九年までの四年間で二万四〇〇〇服に及ぶ<sup>(31)</sup>。

凄惨な一七〇九年に伝染病への特効薬がフランス全土で渴望されたことは言うまでもない。経験医エルヴェシウスの恩恵を受けた地方は、アミアン、ピカルデイ、ソワッソン、モンタバン、ボルドー、リモージュ、ラ・ロシエル、ブルターニュ、アルザス、ルアン、ディジョン、等々枚挙に暇がない。たとえば、同年三月一三日オルレアン総代監ド・ボアビルは、当地の伝染病に対処するため、そうした医薬の配送を財務総監に要請した。左記の書翰も軍事国務尚書による直接の依頼である<sup>(32)</sup>。

〔軍事国務尚書・シャミヤールの一七〇九年六月九日付経験医エルヴェシウス宛書翰〕

貴下の医薬が赤痢に卓効を示すことを、ニヴェルノワの民衆は二年前実感しました。そこで本年も貴下が当

地に医薬を送付するよう指示してほしい、とダブレージュ殿がここに同封する手紙で依頼してきました。これら貧民の死活は貴下の双肩にかかり、彼らの救済は貴下の慈愛にまたねばなりません。すすんで引き受けてくださる、と私は確信しています。すくなくとも一万服お送りください。軍事病院と同じ単価で支払を致します。

ヴェルサイユ、一七〇九年六月九日

〔軍事國務尚書〕

シャミヤール<sup>(33)</sup>、

経験医エルヴェシウスが用意した医薬は、一七〇九年の時点でイペカ吐剤のほかすくなくとも一二種を数える。天然痘へのエリキシル剤、嘔吐・胃病へのアプサント精剤、肋膜炎への発汗パスタなどがある。これらを配送する際に彼は詳細な使用書を添付し、辺境の地においても容易に投薬できるよう配慮した。宮廷医ジャン・クロード・アドリアン・エルヴェシウスも一七〇八年からこうした父親の事業を補佐し、むしろ実務の中心を担ったと思われる。<sup>(34)</sup>「名門エルヴェシウス家―国王の施療」の著者ラフォンは、農村部への医薬配送について経験医エルヴェシウスの章ではなく、もっぱら宮廷医エルヴェシウスの章で記述している。以下もラフォンが収集した凄惨な年の公文書である。

〔モンタルギ総代監ファイエの一七〇九年七月三一日付財務総監デマレ宛書翰〕

閣下の指令によりエルヴェシウス殿から送付された医薬二〇〇〇服、ならびにその用法に関する多数の刷りものを、本月二六日受け取りました。これらを私は遺漏なく配分するつもりです。ところで閣下の二七日付書翰が今日届けられ、そこに同封された新しい説明書にはこの地方に蔓延する熱病への対処が述べられています。あちこちで種々の病気が猛威を振り、住民の半数までも減ぼしたこの地方のために、説明書を私は三〇〇部増し刷りするつもりです。諸病が終息した、すくなくとも減退した、と一月前には思われたのですが、現在では以前と同じように頻発し、秋を迎えて一層増大する兆しを見させています。<sup>(35)</sup>

〔経験医エルヴェシウスの一七〇九年九月二日付財務総監アマレ宛書翰〕

拝啓。閣下より指令を頂きましたので、モンジュロン殿へ赤痢の特効薬一〇〇〇服、またピロン殿へ悪性熱病の特効薬四〇〇〇服を早急に送付致します。

なお、貧民救済のため医薬配分総括官が設置されるよう、さきに私は上申書を提出し、その謄本を作成することもお許し頂きました。謄本はラガルト殿のもと回付され、検討されました。提案に難はなく、実現も容易で利益は大きい、とラガルト殿は賛同されるのです。以上のような経緯を閣下に報告するとともに、こうした方向で適切な指示を頂き、このたびも加護を賜るよう切望致します。

一七〇九年九月二日

ジャン・アドリアン・エルヴェシウス<sup>(36)</sup>

こうして二代にわたる医家エルヴェシウスはフランスの公衆医療に多大の貢献を為し遂げる。とはいえ、彼らが切望したのは、農村部への医薬配送をより定期的に行うことであり、貧しい農民への施療をより組織化することであった。医療政策を改善するための請願が、政治権力の中枢を担う財務総監デマレや軍事國務尚書シャミヤールに経験医エルヴェシウスの名義で提出される。なかでも凄惨な年のさなかに直接ルイ十四世へ上奏された請願書は、医薬による貧民救済への熱意をよく表している。<sup>(37)</sup>

〔ルイ十四世に対する経験医エルヴェシウスの請願書〕

国王陛下

オルレアン公侍医 ジャン・アドリアン・エルヴェシウス

畏れ多くも陛下は二十年前本請願者の特効薬についてその価値を認められ、金貨一〇〇〇ルイを下賜される

とともに、一六八八年八月二三日専売特認書を授与されました。また、農村部の貧民を救済するため、特効薬を王国全土に配分することがこの特認書によって許可されました。〔中略〕

しかしながら、種々の伝染病がしばしば猛威を振り、臣民の命を無数に奪っています。なぜなら、当該地域における緊急の必要性について連絡がなされないか、あまりにも遅く届くため、諸閣僚の指示も皆無となるか、遅きに失するからです。

このような災禍を防ぐもつとも確かな施策は、伝染病への医薬を毎年定期的に一定量配分することです。どの総徴税管区にしても、大半の村落では突発性や伝染性の病気に襲われた場合、大抵は貧弱な医薬しか備えぬ外科医に救助を求めるほかありません。〔中略〕

ここに提案し申し上げる制度、民衆の福祉のためかくも重要な施策を妨げる唯一の障壁は、経費の問題でありましょう。こうした障壁は怖れるに足りぬと思われれます。本請願者は己れの利益よりも臣民の利益を重んじ、いかなる医薬の価格も一種一服につき五スーと定めます。この価格はきわめて貧しい患者にも重荷ではなく、村落の外科医や薬剤師や医薬配達人には正当な報酬となります。子どもや虚弱体質には半服か四分の一服で足りるので、残余によって新たな一服を作り、新たな代価が得られます。したがって、これを富裕な人々に売れば、貧者に医薬を原価で与えても、外科医たちは埋め合せできるのです。〔中略〕

配分される医薬および添付された使用書は総代監宛に發送され、村落の外科医によって、また外科医もいないところでは主任司祭によって管理して頂きます。

明確で厳密な用法を記した印刷冊子を請願者は農村部へ發送する医薬に添付します。専門の医師がいなくとも、これによつてもつとも必要な医薬が使用可能になります。村毎に通常の年は一種の医薬につき六〇服で足

りると思われます。ただし、伝染病が蔓延の兆しを見せ、より緊急で広汎な援助を要するときに備えて、本請願者は五万服の医薬を常時手元に備えるよう努めます。

人民の救済について宏遠な計画を抱かれる陛下が、不遜な私の請願にご留意くださるようお願いするとともに、ますますご壮健であられることをお祈り申し上げます。<sup>(38)</sup>

しかしながら、このような医家エルヴェシウスの悲願は狭量な為政者には採択されなかった。官職の新設を含む医薬配達の制度化は国庫に負担をかけると言うのである。ここに引用したルイ十四世への請願書は、現在も国立古文書館に保管されるが、その左肩にヴェルサイユ宮での決裁が記載されている。「国王はこうした官職の新設を認め給はず。」<sup>(39)</sup>

#### 〈註〉

本稿における主要な文献に関しては、下記の略号を使用する。

- Ch : Ian CUMMING, *Helvétius, His Life and Place in the History of Educational Thought*, London, Routledge et Kegan Paul Ltd., 1955.  
Hn : Jean-Christien-Ferdinand HOEFER, *Nouvelle biographie générale*, Paris, Firman Didot Frères, 1857-1864, 46 volumes.  
Jm : Valentin JAMERÉY-DUYVAL, *Mémoires*, présentés par J. M. Goulemot, Paris, Le Sycomore, 1981.  
Ld : Louis LAFOND, *La Dynastie des Hébelius, les remèdes du roi*, Paris, Octavia, 1926.  
Sm : Louis Rouvroi SAINT-SIMON, *Mémoires*, éd. par Y. Coirault, Paris, Gallimard, 1983-1988, 8 volumes.  
Voh : VOLTAIRE, *Oeuvres historiques*, ed. par R. Pomeau, Paris, Gallimard, 1957.

(一) Jacques SAINT-GERMAIN, *La Vie quotidienne en France à la fin du grand siècle*, Paris, Hachette, 1965, p. 170.  
VOLTAIRE, *Le siècle de Louis XIV*, dans *Voh*, pp. 856-859.

〔参考〕ヴォルテール著、丸山熊雄訳『ルイ十四世の世紀』岩波書店、一九七四年。第二巻。一〇三—一一頁。  
 ヴォルテールも一七〇九年の極寒について左記のように述べる。

「一七〇九年の苛酷な冬が国民全体を絶望の淵に突き落した。フランス南部の重要な資源であるオリヴは枯死する。ほとんどの果樹も水結した。収穫の望みがまったく消えた。」(Ibid., p. 857.)

- (2) Georges DETHAN, *Nouvelle histoire de Paris, Paris au temps de Louis XIV*, Paris, Hachette, 1990, p. 150.
  - (3) SAINT-GERMAIN, *op. cit.*, p. 171.
- スウェーデンの学者セルシウスによって摂氏温度計が発明される以前であり、パリ天文台の気象記録も散佚しているが、当時の状況を誌した種々の文献から一月五日の最低気温は氷点下四十度と推定される。なお、正式に観測されたパリの史上最低気温は一八七九年一月一日の氷点下二五・六度である。
- (4) SAINT-GERMAIN, *op. cit.*, pp. 171-172. DETHAN, *op. cit.*, pp. 150-151.
  - (5) SAINT-GERMAIN, *op. cit.*, pp. 171-173.
  - (6) *Sm*, tome III, pp. 398-399. cf. *Hn*, tome XLIII, pp. 105-106.
  - (7) SAINT-GERMAIN, *op. cit.*, pp. 210, 213, 215. DETHAN, *op. cit.*, pp. 151-153.
  - (8) *Sm*, tome III, pp. 402-403.
  - (9) DETHAN, *op. cit.*, pp. 150-154. SAINT-GERMAIN, *op. cit.*, pp. 176-177.
- なお、病原菌の発見以前には赤痢という病名が現代よりも広義に用いられていた。「激烈で頻繁な便意を伴い、粘液状の血便を排出する疾患が〔赤痢〕と呼ばれた。いまだ区別されていない種々の疾患をよせ集め、雑然たる一群にしたものが、実際にはそれであった。おそらくそれらの若干が細菌性の赤痢に繋がる疾患であったと思われる。〔中略〕暑さ、寒さ、湿気、飢えに脅かされる人の貧弱な食事、緑色の果物や塩辛い肉の食べ過ぎなどが病因とみなされたあと、赤痢は飲み水の如何に起因すると考えられた。」(Marcel SENDRAIL et al., *Histoire culturelle de la maladie*, Paris, Privat, 1980, p. 351. 〔参考〕サン・ドライエほか著、中川米造、村上陽一郎訳『病の文化史』リブロー、一九八四年。上、八八頁。)
- (10) SAINT-GERMAIN, *op. cit.*, pp. 177-779.
  - (11) *Sm*, tome III, pp. 393-394.
  - (12) *Ld*, p. 105. *Ch*, pp. 3-4.
  - (13) *Ld*, p. 49.

なお、細民に対する経験医エルヴェシウスの治療は、たとえばパリ近郊マルヌの古文書に数多く記録されている。

「貧しいブドウ栽培者ジャン・コリニイは、肺部に粘液質の腫瘍ができたため、つねに高熱に悩み、生きる望みを失っていた。しかし、一日に金水を三回服用させたところ、第二日に身体が赤くなって、胸部の圧迫が消え、健康を回復した。」  
「また、ブヴェット・パロワという婦人は、牛を絞め殺したときのように、大量の鮮血を吐いたが、一服の金水を与えると、苦痛がなくなった。」

「貧しい婦人マリー・ティエンヌは胃液過剰で頻繁に便意を催し、また激痛とともに多量の吐血に苦しむため、極度に衰弱していた。もっぱらイベカ吐剤および鎮痛用サンゴの粉末を与えると、彼女は完全に治癒した。」(Archives de la Marne, cité dans *Ld.*, pp. 99-102.)

(14) Jacques-Albert HAZON, *Notice des hommes les plus célèbres de la Faculté de médecine en l'Université de Paris*, Paris, Benoit, 1778, p. 210.

(15) Alfred FRANKLIN, *Histoire de la Bibliothèque Mazarine et du Palais de l'Institut*, Paris, Welter, 1901, pp. 126-127, 198-199.

(16) HAZON, *op. cit.*, p. 210.

(17) DETHAN, *op. cit.*, pp. 186-192, 196-198.

Marcel FOSSEYEUX, *L'Hôtel-Dieu de Paris au XVIIe et XVIIIe siècle*, Paris, Berger-Levrault et Cie, 1912, pp. 216-218, 232-234.

(18) FOSSEYEUX, *op. cit.*, pp. 300-302.

(19) Jacques HILLAIRET, *Dictionnaire historiques des rues de Paris*, Paris, Maloine, 1899, pp. 389-394.

因みに一七八〇年代の記録ではあるが、メルシエはパリ治療院の実態を左記のように評する。

「われらの治療院の慈善とはいかに残酷なものか。死への介護、欺瞞的で陰惨な誘い。自分の家でひとり自然に委ねられる細民の死より百倍も哀れで怖ろしい死。神の館と呼んでよいものか。人間性への侮辱がそこで蒙る苦痛を倍加させる。

医者や外科医への払いは心配しなくともよい。結構である。医薬も無料とされる。それは判っている。だが、瀕死の遺体の横に患者を寝かせるではないか。死の光景をまのあたりにさせ、怯える魂に恐怖の悶えを滲み込ませる。〔中略〕

大気が湿り、風通しが悪いため、パリ治療院は悪疫を蔓延させる条件をすべて備えている。病人がすこしでもそこに滞在すると、傷口はすぐ壊疽になり、壊血病や疥癬の猛威にも襲われる。

本来もつとも単純な疾患が、この空気の感染によって必然的に重大な併発病を帯びる。頭や足の簡単な傷口がこの病院で致命傷になるのも、同じ原因による。

パリ施療院およびビーセル精神病院で毎年歿する細民の数ほど、私の主張を裏つけるものはない。患者の五分の一が死ぬ。戦慄すべき数字であるが、人々はあわめて冷徹にこれを眺める。」(Louis-Sébastien MERCIER, *Traité de Paris*, Amsterdam, 1782, tome III, pp. 226-231. (参考)メルシエ著、原宏編訳「十八世紀パリ生活誌」岩波書店、一九八九年。下、一八四—一八八頁。)

- (20) FOSSEYEUX, *op. cit.*, pp. 304-306.
- (21) FOSSEYEUX, *op. cit.*, p. 85. LE MAGUET, *op. cit.*, pp. 390-393.
- (22) FOSSEYEUX, *op. cit.*, p. 326.
- (23) HAZON, *op. cit.*, pp. 210-211. *Ld.*, pp. 105-106.
- (24) SAINT-GERMAIN, *op. cit.*, pp. 177-178.
- (25) *Jm.*, pp. 111-112.
- Jean-Marie GOULEMOT, Introduction, dans *Jm.*, pp. 22-23.
- (26) *Jm.*, pp. 159-161.
- (27) SAINT-GERMAIN, *op. cit.*, pp. 176-177.
- (28) *Jm.*, pp. 159-161.
- (29) SAINT-GERMAIN, *op. cit.*, pp. 177, 184-188.
- (30) *Jm.*, pp. 164-165.

この自伝は烈々たる政治批判を含むため、著者の生前には刊行できず、一七七七年にようやくフィレンチエで抜粋版が出版された。ただし、ジャムレー・デュヴァルはすでに一七三四年より『回想』の執筆を始めており、ルソーとヴォルテールは同書手稿の写しを保持していた。なお、一七〇九年に関する叙述からも察せられるように、災禍や貧困の体験から富者・権力者への非難へと進むジャムレー・デュヴァルは徴税総括請負人としての労苦から革命的な社会理論の構築に到達する哲学者クロード・アドリアン・エルヴェシウスと類似性を持っている。はたして哲学者エルヴェシウスは『回想』を読んだであろうか。ジャムレー・デュヴァルは一七五二年にパリで啓蒙思想家デュクロと親交を結んだが、両者の仲介をしたのは文芸サロン才媛フランソワーズ・ディッサンプル・グラフィニであった。彼女はエルヴェシウス夫人アン

ヌ・ド・リニヴィルの叔母かつ後見人にあたる。哲学者エルヴェシウスの一家がジャムレーーデヴァアルや彼の「回想」に  
関心を寄せた可能性は高いと筆者には思われる。GOULEMOT, *op. cit.*, pp. 26-27.

- (31) *Ld.*, pp. 125-126.
- (32) *Ld.*, pp. 126-127, 138.
- (33) Lettre de CHAMILLART du 9 juin 1709. Archives nationales. G<sup>s</sup> 716. cité dans *Ld.*, p. 138.
- (34) *Ld.*, pp. 132-134, 145.
- (35) Archives nationales. Correspondance des Contrôleurs Généraux. cité dans *Ld.*, pp. 138-139.
- (36) Lettre de J.-A. HELVETIUS à Desmaretz du 2 septembre 1709, cité dans *Ld.*, pp. 134-135.
- (37) *Ld.*, pp. 132-135.
- (38) Requête de J.-A. HELVETIUS à Louis XIV. Archives nationales. G<sup>s</sup> 716 cité dans *Ld.*, pp. 129-132.
- (39) *Ld.*, p. 136.

